

## はじめに

子どもたちを取り巻く社会環境は、高度情報化、少子高齢化、国際化などにより、大きく変化しています。学校現場もまた新教育課程の実施をはじめ、さまざまな教育改革が推進され、大きく変わろうとしています。

そんな中、本調査研究では、「保護者の子育て意識に関する調査 - 学校と家庭の連携を求めて - 」と題し、保護者が子どもの教育にどんな思いを抱き、どう子育てしようとしているのか、しつけや子育てに関する保護者の意識をとらえるため、「学校教育」と「家庭教育」と「保護者の価値観」を柱にアンケートを構成・実施しました。本研究所では、昭和56(1981)年に「社会は学校・家庭・社会教育に何を望み期待するか - 児童・生徒、教師、保護者アンケートより - 」の調査を実施していますが、その結果と比較考察することで、児童・生徒理解をさらに深め、今後の教育活動に生かすことができる資料作成をねらいとしています。

アンケートの中の、「子どもをしつけるときに何を参考にしていますか」という設問に対して、「子どもの意見」という回答が、「配偶者の意見」「友だち・知人の意見」に次いで3番目に高い割合でした。価値観が多様化する現代社会の中で、子どもの自主性を尊重するあまり、保護者が自分の信念を持って、子どもに「しつけ」ができない状況になってしまっているとも考えられ、保護者の迷いが読み取れる結果となりました。今回実施した調査は項目や分析方法等においてまだまだ不十分な点がありますが、この調査結果を日々の活動に役立てていただくことを期待しております。

終わりにになりましたが、調査研究のためにいつも熱心にご指導をいただきました大阪大学大学院人間科学研究科教授の近藤博之先生をはじめ、一年間にわたってご尽力いただきました調査研究所員の先生方に深く感謝いたします。また、本調査にご協力いただきました関係各学校長ならびに諸先生方に厚くお礼申し上げます。

平成16(2004)年3月

茨木市教育研究所  
所長 堺 陽子

# 目 次

## ．調査研究の概要と構成

1．調査研究の目的	1
2．調査の構成と内容	1
3．調査の実施	1
(1) 調査の対象	1
(2) 調査の方法	1
(3) 調査の実施時期	1
(4) 調査集計の方法	1

## ．調査結果の概要

A．学校教育	3
【設問1】学校週5日制になってよかったですか	5
【設問2】学校での様子で心配なこと	6
【設問3】心配ごとがあるときの相談相手は	7
【設問13】「生きる力」を育てるための教育活動は	8
B．家庭教育	9
【設問4】放課後・休日の子どもの遊び	11
【設問5】子どものしつけの参考は	12
【設問6】「あまくなっている」しつけは	13
【設問7】子ども同士で行ってよいところは	14
【設問8】子ども同士の貸し借りどこまでなら許せる	15
C．保護者の価値観	17
【設問9】携帯電話の使用目的と不安	19
【設問10】子どもの非行を防ぐには	22
【設問11】どんな人間になってもらいたい	23
【設問12】対立する意見への選択	26

．まとめ	29
------	----

## ．調査資料

1．調査票	31
2．データ（集計結果）	35

## ・ 調査研究の概要と構成

### 1．調査研究の目的

高度情報化、少子高齢化、国際化など、私たちを取り巻く社会環境は、大きく変化し、新教育課程をはじめ、さまざまな教育改革が推進され、学校もまた大きく変わろうとしている。そんな中、保護者は、子どもの教育に何を思い、どう子どもを育てようとしているのか、保護者のしつけや子育てに関する意識をとらえ、今後の保護者と学校とのよりよい関係・連携をめざすため、本年度は、「保護者の子育て意識に関する調査 - 学校と家庭の連携を求めて - 」をテーマとし、「学校教育」「家庭教育」「保護者の価値観」を柱にアンケートを構成し、保護者の思いや実態を調べた。その中で、これからの課題を明らかにし、今後の教育を進める上での指導資料の一つになることを目的としている。

### 2．調査の構成と内容

この調査は、「保護者の子育て意識に関する調査 - 学校と家庭の連携を求めて - 」をテーマに、次の三つの柱から成り立っている。

- A. 「学校教育」
- B. 「家庭教育」
- C. 「保護者の価値観」

### 3．調査の実施時期

#### (1)調査の対象

校 種	学 年	校 数	児 童 ・ 生 徒 数		人 数 計
小 学 校	5 年	7 校	628 人	1261 人	1836 人
	6 年	7 校	633 人		
中 学 校	2 年	3 校	575 人		

茨木市内の小・中学校の中から、上記のように学校を抽出し、各学年全クラスの保護者に対して実施し、1490人の回答を得た。(81.2%の回収率)

#### (2)調査の方法

児童・生徒を通して、調査用紙を配布し、保護者による記入とした。

各設問の該当する選択肢の横に もしくは、番号で回答するようにした。

回収については、調査用紙を封筒に入れて、密封提出とした。それらを学校でまとめ、教育研究所に送付する方法をとった。

#### (3)調査の実施時期

各学校への調査用紙の配布 …………… 平成 15 年 7 月 4 日(金)

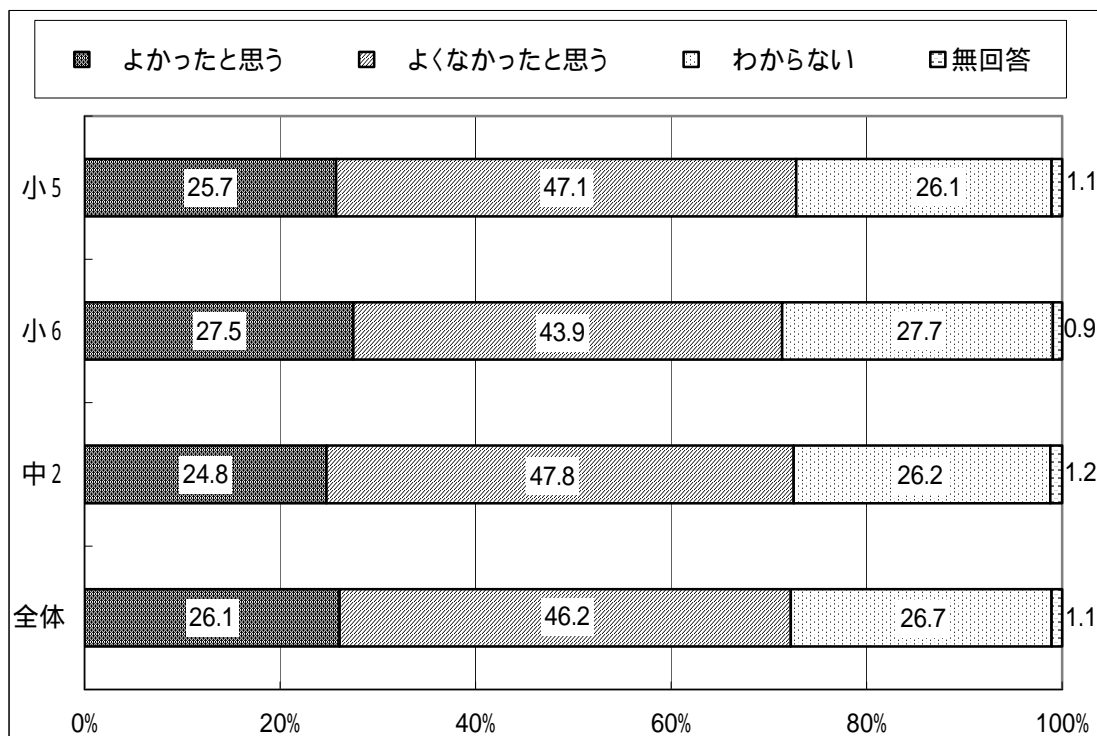
教育研究所への提出期限 …………… 平成 15 年 7 月 18 日(金)

#### (4)調査集計の方法

市情報政策課において、電算機を使用し、集計結果を教育研究所にて編集した。

## 【設問1】

学校が新しい教育課程になって2年目をむかえました。あなたは、学校が完全週5日制になってよかったと思いますか。お子さんたちの様子から1つ選んでください。



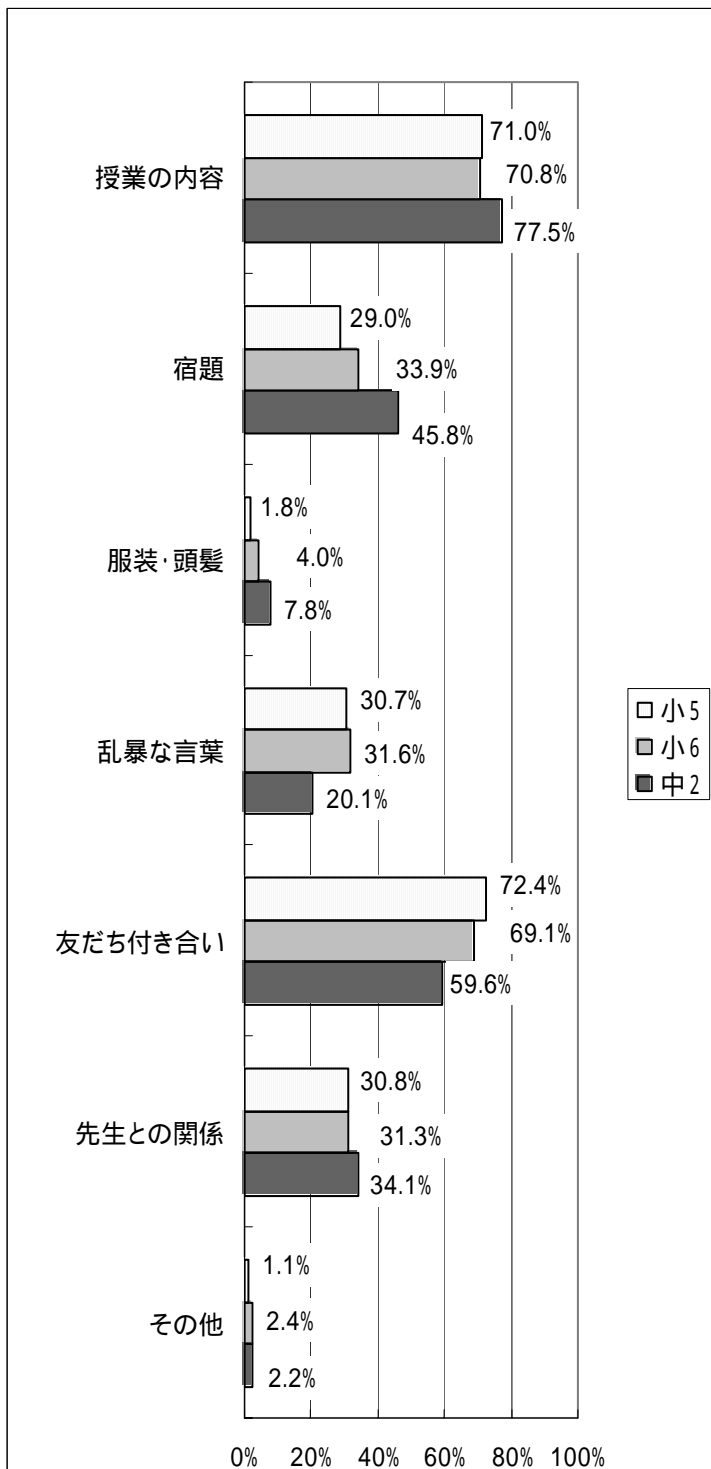
### 考察

各学年の保護者の半数近くが、学校5日制を「よくなかったと思う」と考えており、「よかったと思う」「わからない」の回答が、それぞれ4分の1ずつとなる。その割合は各学年でほぼ同じであり、保護者全般の考えといえそうだ。一方、昨年度調査での児童生徒への同内容の質問では、約60%の児童生徒が「よかった」と答えており、その主な理由として「友人との遊び」「家族との時間」「休養」があげられている。

さらに、一昨年に行われた5日制施行前の保護者調査では、「不安である」が半数近くであり、「変化がない」とする予想が半数を超えていた。今回の調査の否定的な回答と対応しているものと思われる。その背景に、「スポーツ」や「趣味」といった個性伸長への期待感是非常に高いのに、それらの期待感が十分に達成されていない現状があると考えられる。

## 【設問 2】

学校でのお子さんの様子について、何か心配に思うことがありますか。  
次にあげることからで、あなたが気になるものすべてに をつけてください。



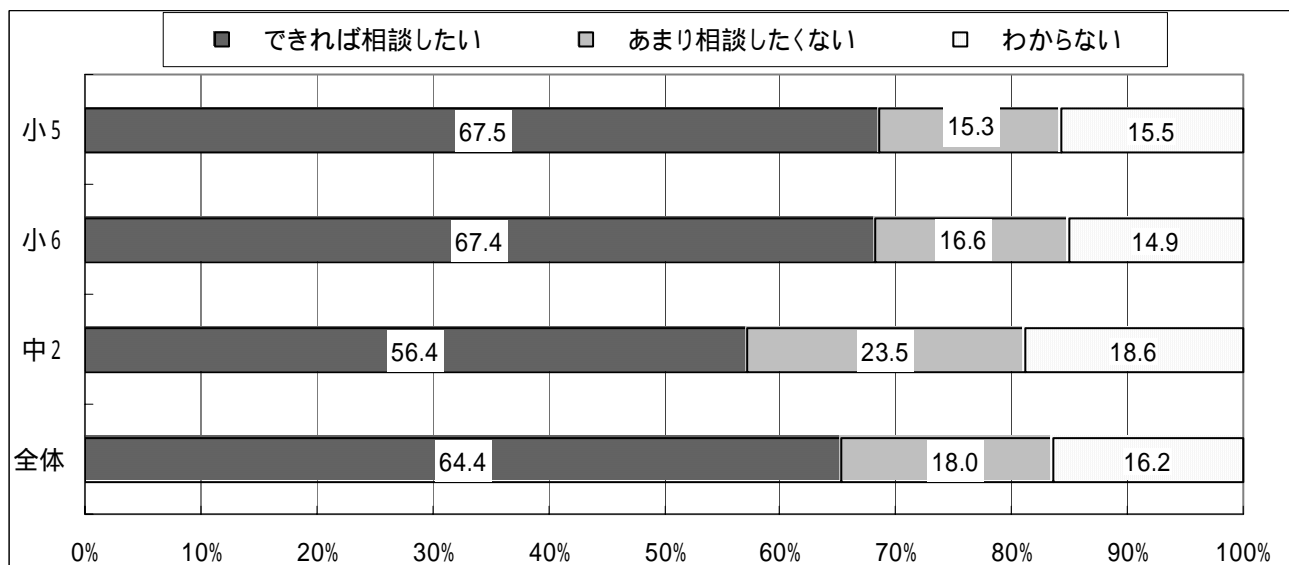
### 考察

各学年の保護者の 70% 前後が「授業の内容」「友だち付き合い」を心配に思っている。次いで、「宿題」「乱暴な言葉」「先生との関係」が 30%程度となり、「服装・頭髪」に関しては、いずれも 10%以下となる。小学生・中学生での特徴の違いを見ると、中学生の保護者では、「宿題」への心配が、小学生の保護者では、「乱暴な言葉」への心配がそれぞれ 10%程度高くなっている。

いずれも、保護者が特に心配に感じるのはい見えにくい部分にあると考えられる。特に学校に対しては、「授業の内容」の質の向上や、学校内での詳しい情報を求められているのかもしれない。さらにインターネットや携帯メール等を通じての児童生徒を取り巻く「友だち付き合い」への心配も考えられる。

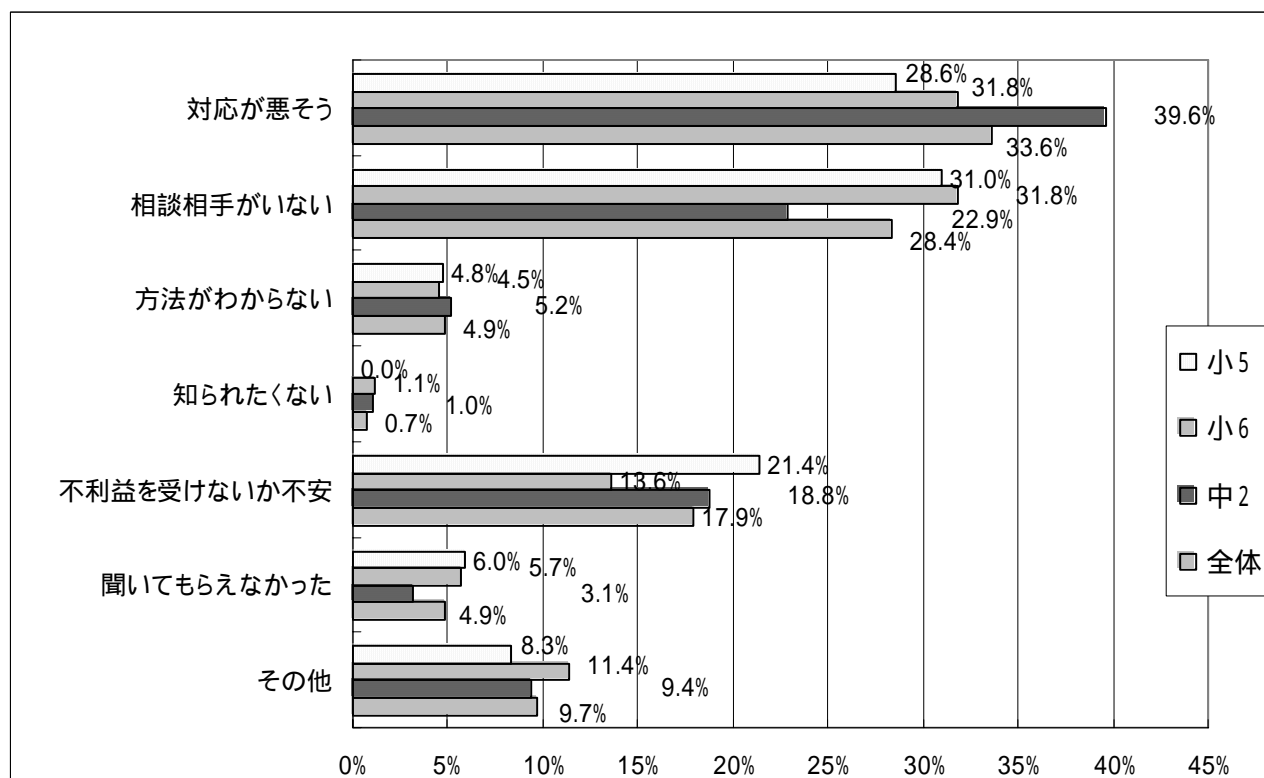
【設問3】

お子さんのことについて、何か心配ごとがあるときに、あなたは学校に相談したいと思いますか。あなたの気持ちに近い番号を1つ選んでください。



(1) 「あまり相談したくない」と答えた方に聞きます。

「相談したくない」のは、どうしてでしょうか。あてはまる理由を1つ選んでください。

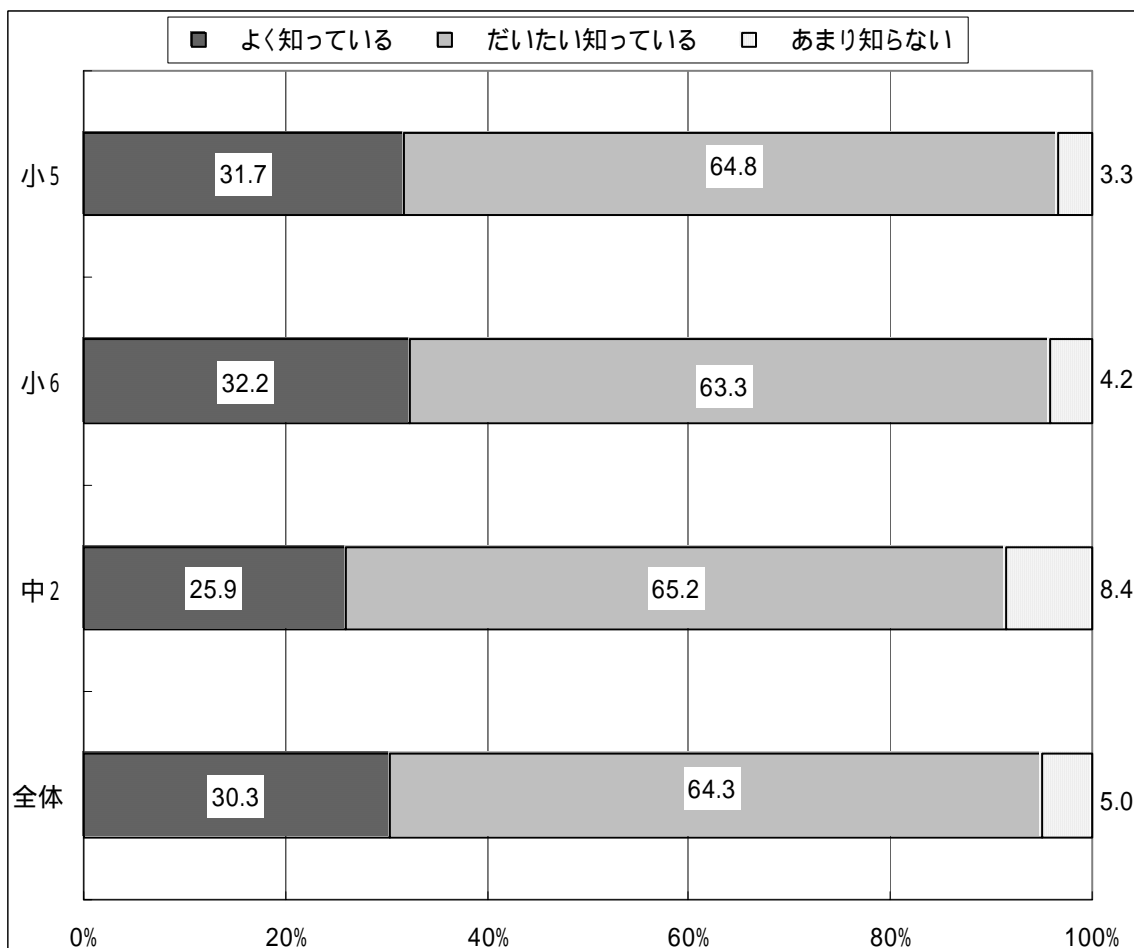


考察

心配ごとがあるときに学校に「できれば相談したい」とする保護者が小学校で約70%、中学校では約60%と、相談相手として学校が保護者から信頼を得ているものと考えられる。逆に「あまり相談したくない」とする回答は、約20%であるが、やはり中学生では若干高くなる。相談したくない理由としては「対応が悪そう」「相談相手がない」の回答が特に多く、中学生では「対応の悪さ」が若干多くなっている。

#### 【設問4】

あなたは、放課後や休日にお子さんが誰とどんなふうに遊んでいるか知っていますか。  
あてはまる番号を1つ選んでください。



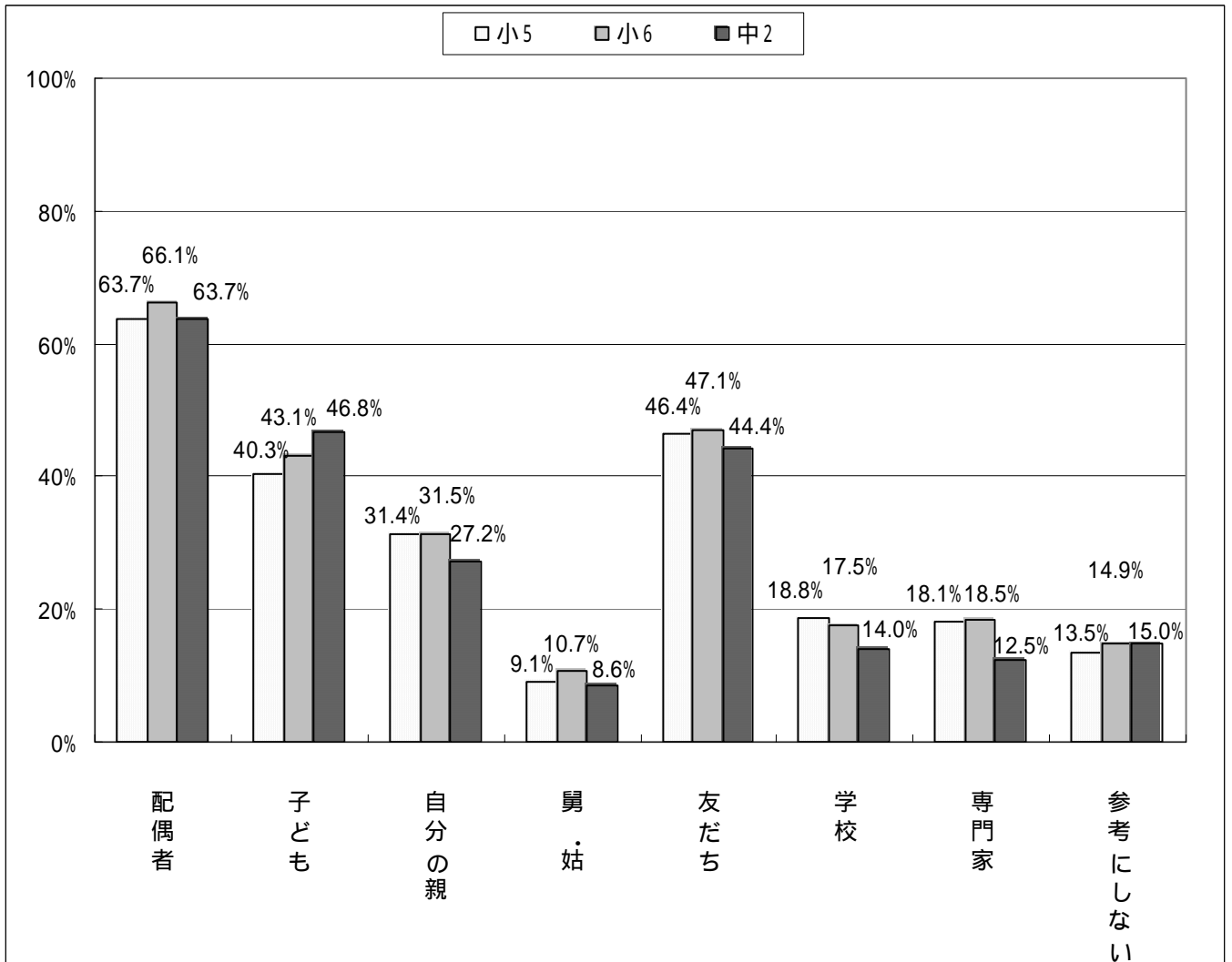
#### 考察

小、中学生の保護者はともに、「よく知っている」「だいたい知っている」、という回答が合わせて95%程度で、あまり学年による差はないようである。学年が上がるとともに、保護者からの干渉は少なくなるが、子どもたちの遊びについて、保護者はだいたいのことを知っていると言えそうだ。

しかし、よく知っているという回答は、小学生32%に比べて、中学生では26%と減っている。また逆に、あまり知らないという回答は、小学生3%、4%に比べて、中学生では8%と増えている。学年が上がるとともに、子どもたちの遊びは範囲が広がり、保護者が知りにくくなっているように考えられる。

### 【設問5】

あなたは、子どもをしつけるときに何を参考にしていますか。あてはまるものすべてに をつけてください。



### 考察

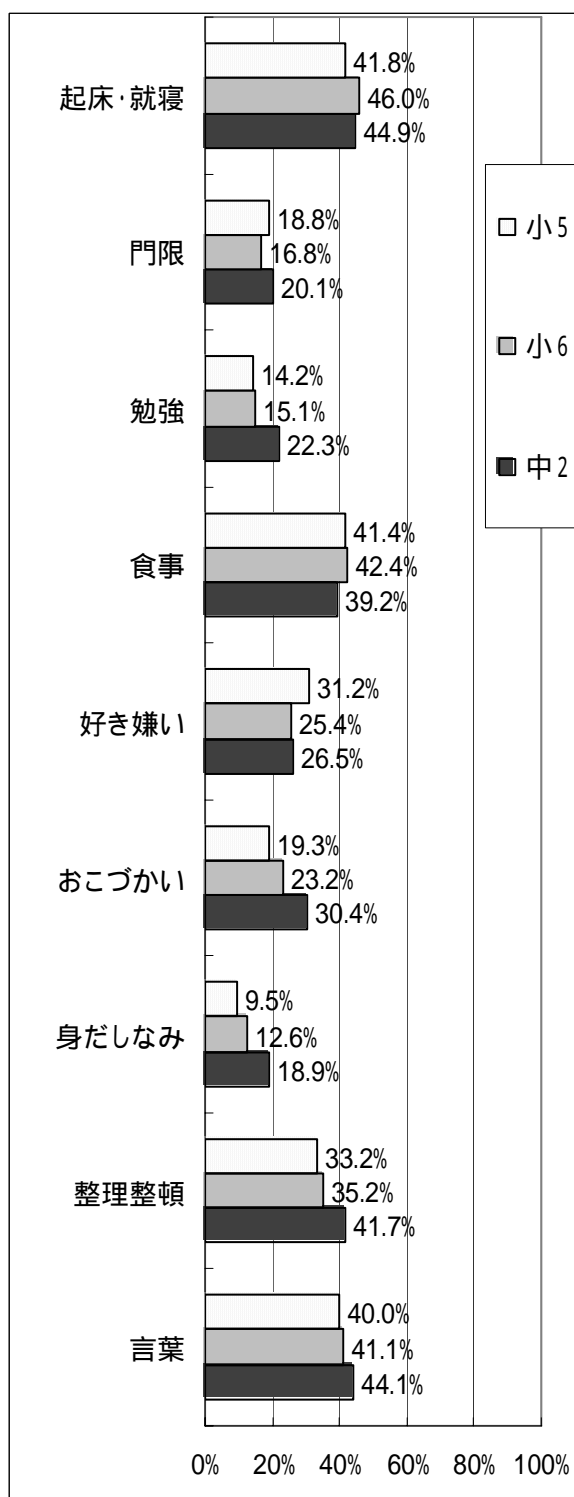
どの学年の親も、しつけについて参考にする割合は、「配偶者の意見」が約64%~66%と最も高く、ついで「友だち・知人の意見」を参考にするが約44%~47%あり、「子どもの意見」を参考にするが、約40%~46%ある。そして、「自分の親の意見」を参考にするが、約27%~32%ある。

子育ての上での、しつけにおいては、身内や母親にとって身近な存在の意見が、参考になるようである。なかでも子どもの意見を参考にしている割合が意外と多い。これより、保護者が自分の子どもと友だち感覚なのか、または、子どもの意見を尊重しないと、家庭での人間関係がうまく回らないのかもしれないということがうかがえる。



## 【設問 6】

お子さんに対するしつけと、あなたが子どものときに受けたしつけとを比べて、「あまくなっている」と思うしつけは何ですか。あてはまるものすべてに をつけてください。



### 考察

保護者があまくなっていると感じているものは、グラフから読み取れるように、「起床や就寝の時間」「食事のマナー」「整理整頓」「言葉づかい」「食べ物の好き嫌い」「おこづかい」に対するしつけなどである。

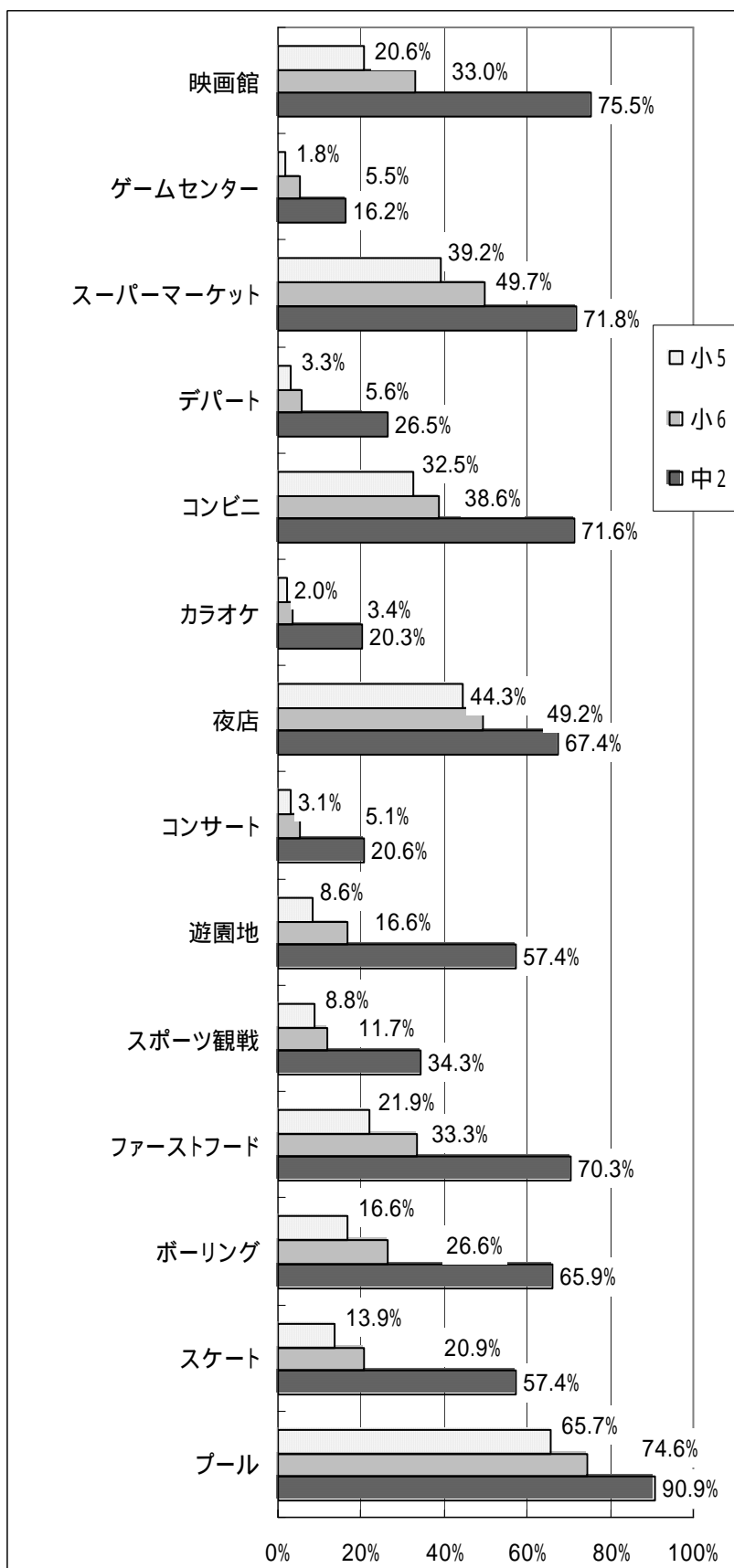
「食事のマナー」や「食べ物の好き嫌い」については、現代の生活様式（テレビのある食卓・食生活の豊かさ・食料品の豊富さ）が関係しているのかもしれない。そして、「整理整頓」や「言葉づかい」などは、子どもに対して、保護者が思うようにならないしつけ項目であると考えられる。特に、中2において、「おこづかいの金額」の割合が3割と高いのは、保護者は、子どもが欲しがるように、こづかいをあげているのではないかと想像できる。また、中学生になって、「身だしなみ」や「勉強について」のしつけが小学校よりあまくなるのは、子どもの自立もあるだろうが、保護者が思うように口出しできなくなってくるからであろう。

勉強に対してのしつけは、学年が上がるほどあまくなるが、いつの時代でも、しつけの中心になっていると考えられる。

割合的には、中学生では「門限を守る」こと、「身だしなみ」について、しつけがあまいとはいえない。これらの項目が保護者からは非行問題と絡むとみなされているからかも知れない。

【設問7】

次にあげる場所で、子ども同士で行ってもよいと思われるところすべてに をつけてください。



考察

学年が上がるにつれて、行ってもよいと思う割合が高くなっている。小学校では、5年、6年と隣接した学年であるからか、いずれも、少し増えている。中学校になると、大きく割合が増える。

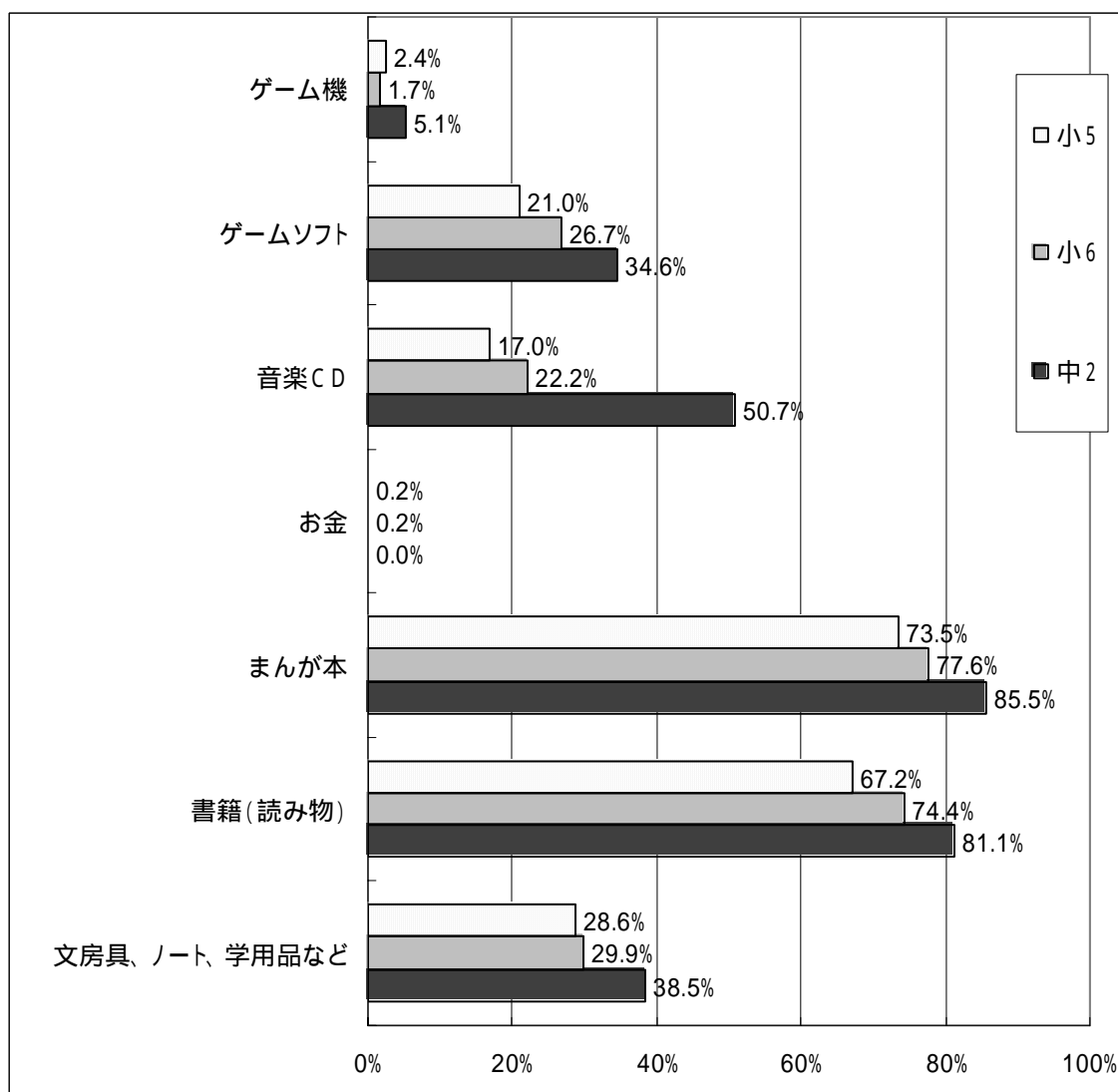
特に、「映画館」「遊園地」「ファーストフード」「ボーリング」「スケート」に行ってもよいと答えた中学2年の保護者の割合は、小学6年の保護者の2倍以上となっている。

しかし、「ゲームセンター」「デパート」「カラオケ」「コンサート」「スポーツ観戦」については、中学校になっても、子ども同士で行くことを認めない傾向にあることがわかる。多くのお金を使うことが予想される娯楽は、保護者の目の届くようにしたいと考えていると思われる。

「プール」に関しては、小5から中2まで、行ってもよいという割合が高い。保護者の年齢層による、差異は顕著ではない。子どもの年齢によって、行ってもよい場所を判断していると言える。

### 【設問8】

子ども同士の物品の貸し借りで、よいと考えるものすべてに をつけてください



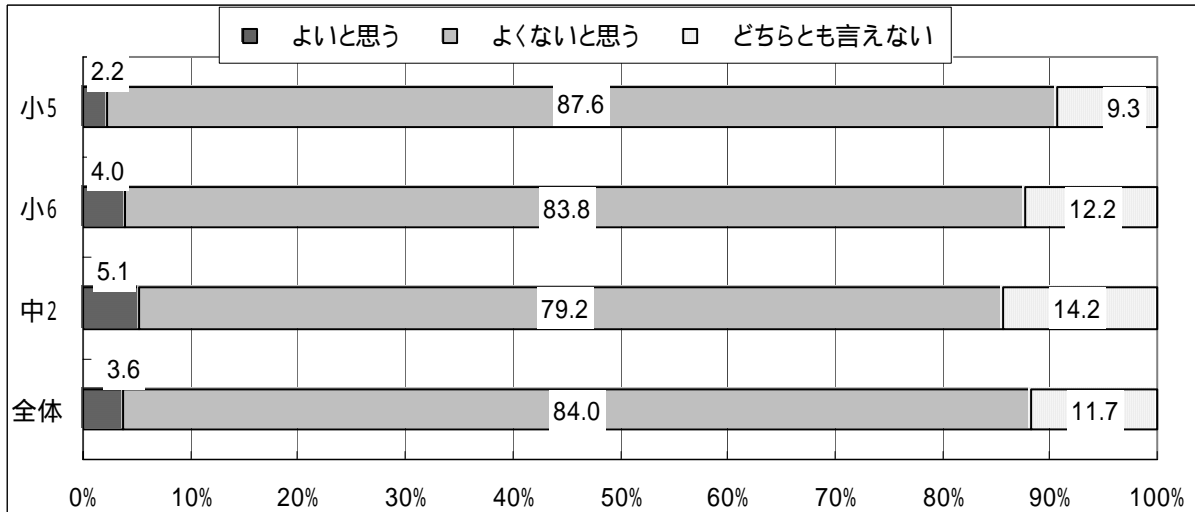
#### 考察

小学生、中学生の保護者はともに、読書に関するものは貸し借りをしてもよいという傾向である。また、ゲーム機など、遊びに関する高価なものや、勉強に関するものは、貸し借りが好ましくないという保護者が多い。そして、お金の貸し借りについては、ほとんどの保護者が否定的である。小学生と中学生の間で最も差が出たのは音楽CDで、小学生は20%前後であるのに対し、中学生は50%を超えている。中学生にとっては、音楽CDは許容範囲と考えられているのだろう。また、どの項目においても、子どもの学年が上がるとともに、貸し借りについて、保護者は寛容になる傾向がある。

【設問 9】

最近では、子どもたちにも携帯電話が広まってきました。このことについてお尋ねします。

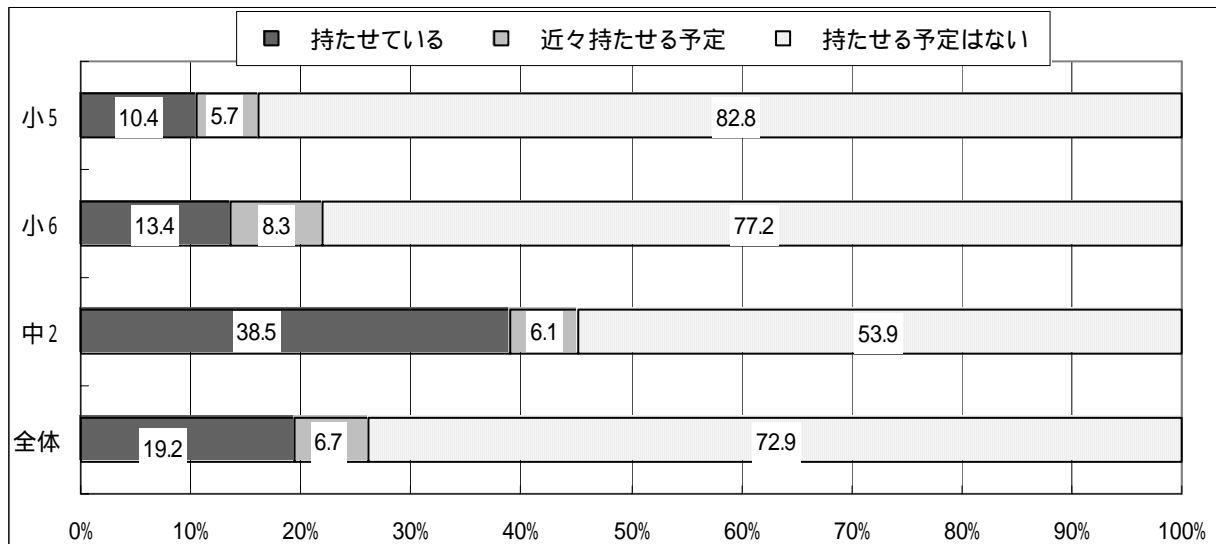
(1) あなたは、学校に携帯電話を持って行ってもよいと思いますか。1つ選んでください。



考察

「学校への携帯電話持参」を、84.0%の保護者が「よくない」と思っているが、どの学年も 10%前後の保護者が「どちらとも言えない」と回答しており、一部では多少の必要性が認められているようだ。

(2) あなたは、お子さんに携帯電話を持たせていますか。また、持たせる予定はありますか。1つ選んでください。

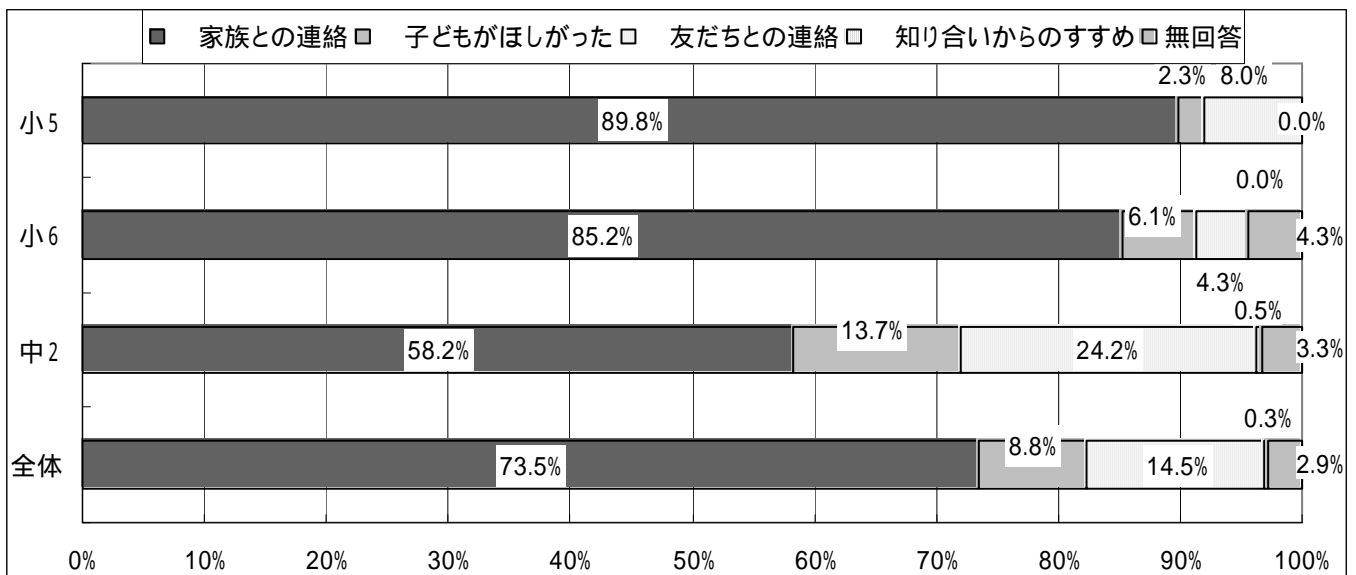


考察

「携帯電話を持たせている」割合は、小5、小6が 10.4%、13.4%であるのに対して、中2になると 38.5%と急増している。子どもの要求が年齢と共に増えていくとも考えられ、保護者が子どもとの連絡のために積極的に持たせているケースもあると思われる。

(2) の設問で「 持たせている」「 近々持たせる予定」と答えられた方に聞きます。

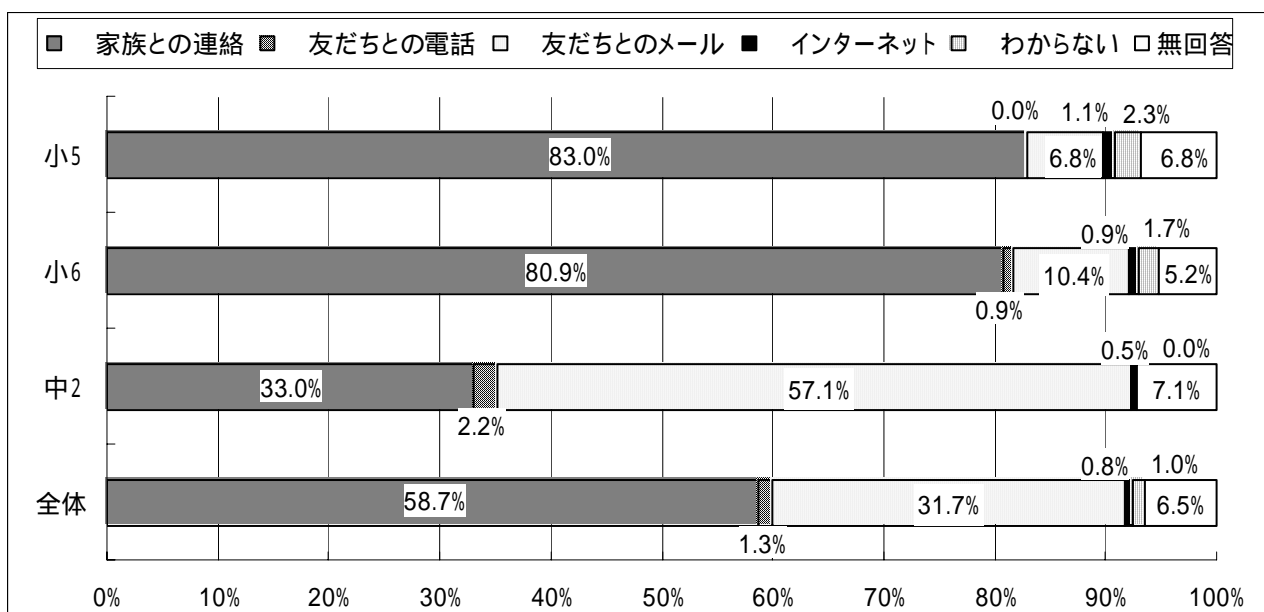
(2-1) お子さんに携帯電話を持たせるようになったきっかけは何ですか (予定も含まます)。主なものを1つ選んでください。



考察

「家族との連絡」の割合が最も高く、小5で89.8%、小6で85.2%であるのに対して、中2は58.2%とやや低く、「友達との連絡」が24.2%と高い割合を占めている。

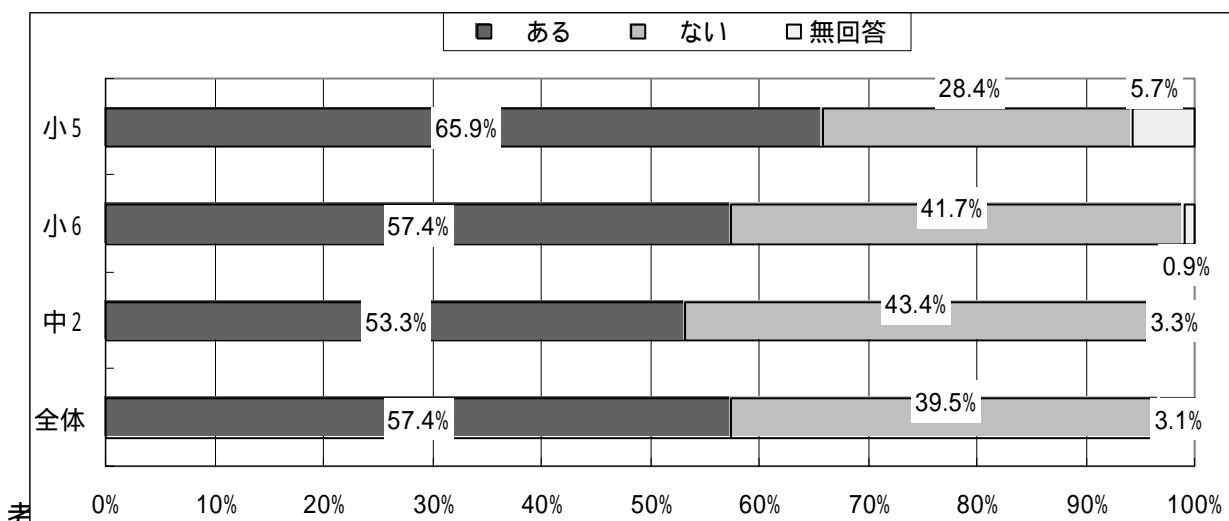
(2-2) お子さんは携帯電話をどのように使っていますか。主なものを1つ選んでください。



考察

「家族との連絡」の割合が最も高く、小5で83.0%、小6が80.9%であるのに対して、中2は33.0%と他の学年の半分以下で、「友だちとのメール」が57.1%と非常に高い割合を占めている。

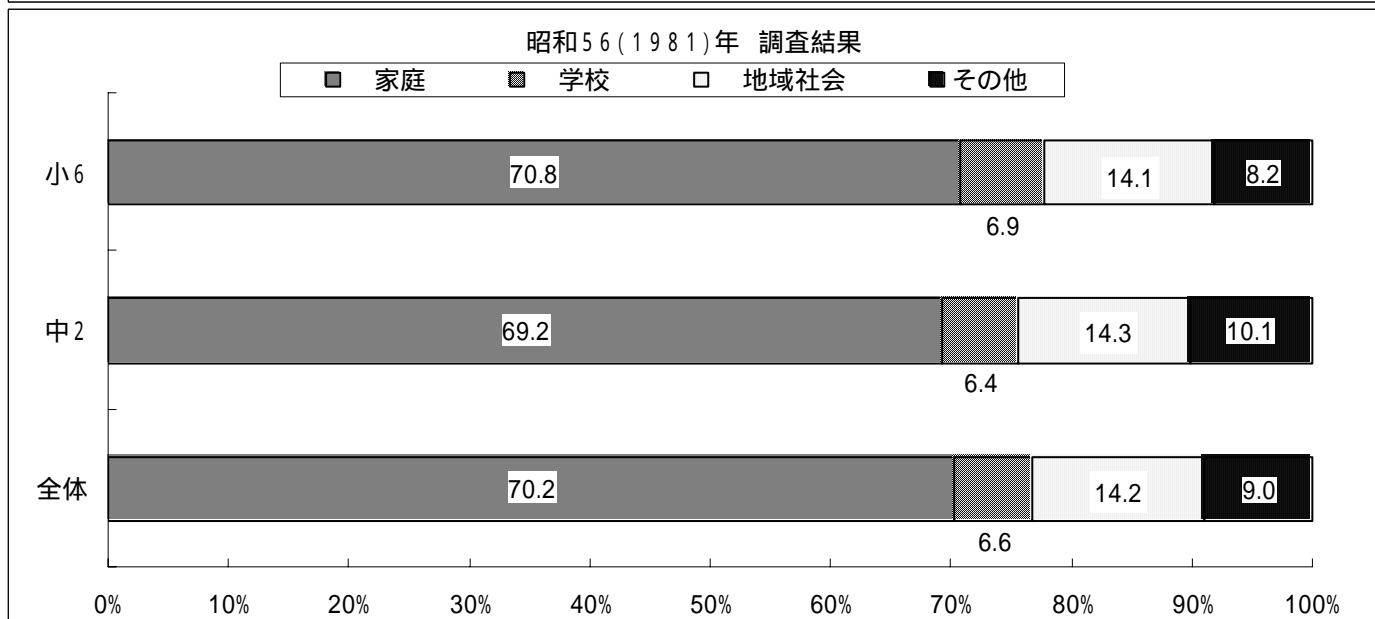
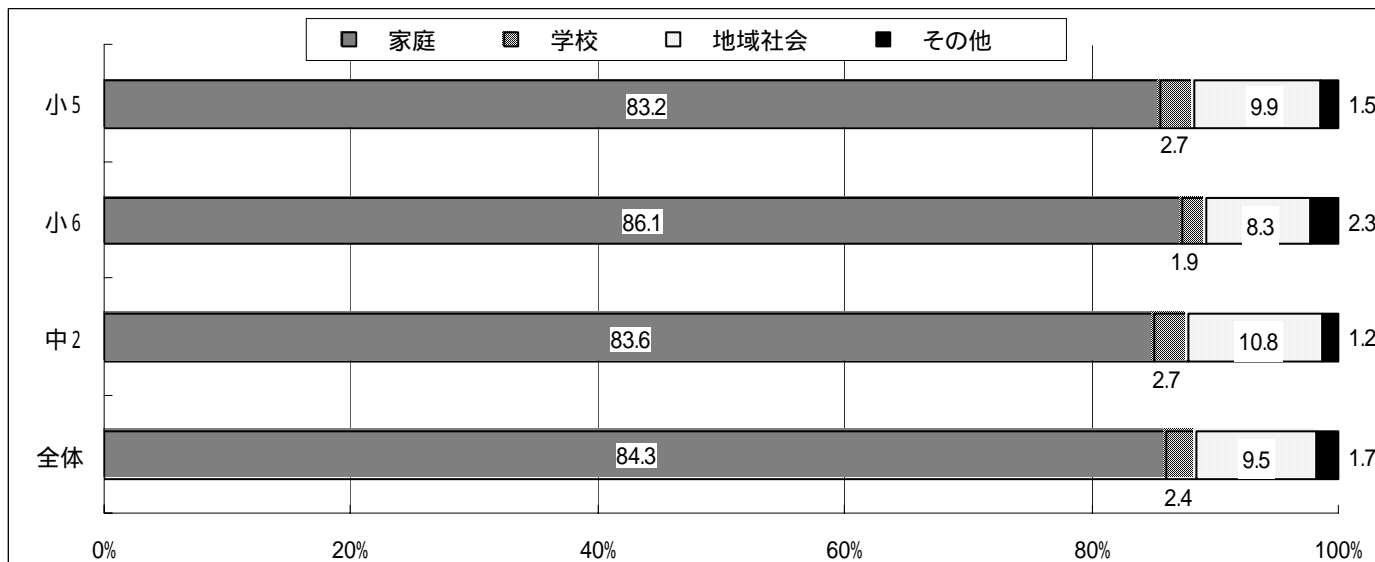
(2-3) お子さんの携帯電話の使い方が心配だと思いませんか。  
どちらか1つ選んでください。



「携帯電話の使い方が心配だと思いませんか」が全体で 57.4%、「心配ない」が全体で 39.5%であった。「心配である」という内容については、今回アンケートをとっていないが、考えられるものとして、 出会い系サイト 利用料金 交友関係が不透明などの理由が予想される。

【設問 10】

子どもの非行を防ぐには、次のどの働きが一番重要だと思いますか。1つ選んでください。



考察

子どもたちの非行を防ぐには「家庭」の働きが重要だと考えている保護者は、全体で84%を超えている。小5・小6・中2共に「家庭」が約83%～86%で、「地域社会」が約8%～11%となっている。「学校」と答えた保護者は、約2%～3%という割合を示している。

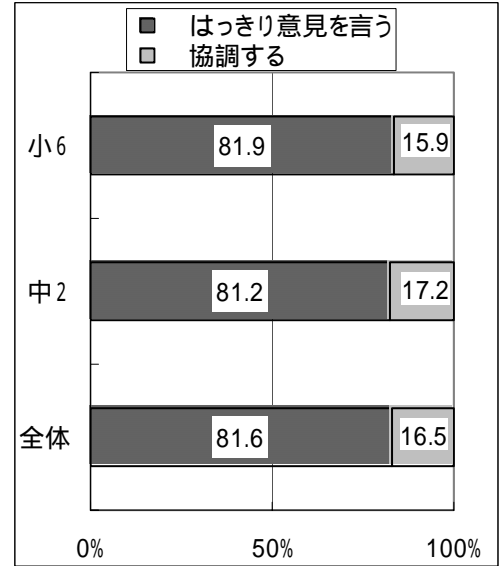
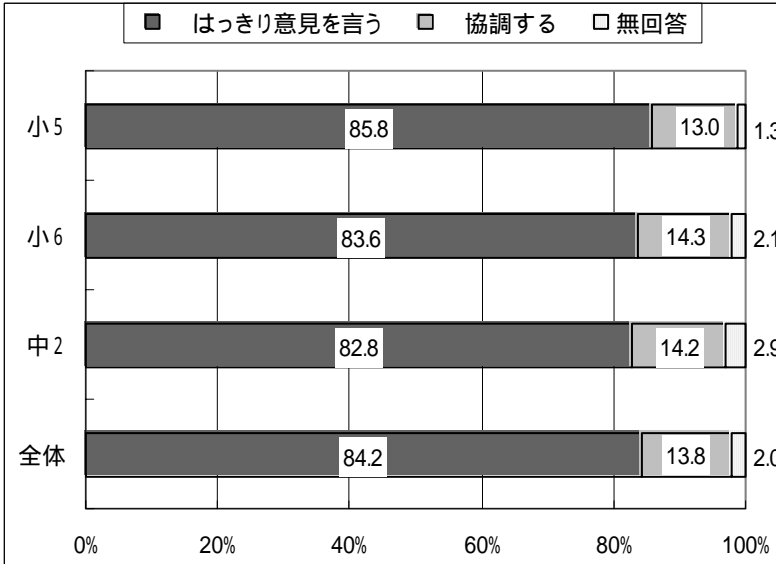
この割合から見ると、非行は家庭の問題と捉えている保護者が多いといえる。また、「地域社会」の割合が学校より高くなっている。

参考までに、昭和56(1981)年の調査では、「家庭」が約70%、「社会」が約14%、「学校」が約6%、「その他」が10%という割合を示している。今回のアンケートと比べてみると、今回は「家庭」が約14ポイント高くなっている。一方「社会」・「学校」が約4ポイント低くなっている。22年前と比べて「家庭」の割合が高くなっている。

【設問 11】

あなたは、お子さんに将来どんな人間になってほしいと思いますか。  
2つの考えの中からあなたの気持ちに近い方の番号を1つ選んでください。

- (1) { 意見の対立はあっても、自分の考えがはっきり言える。  
意見の対立はできるだけさけて、まわりと協調する。

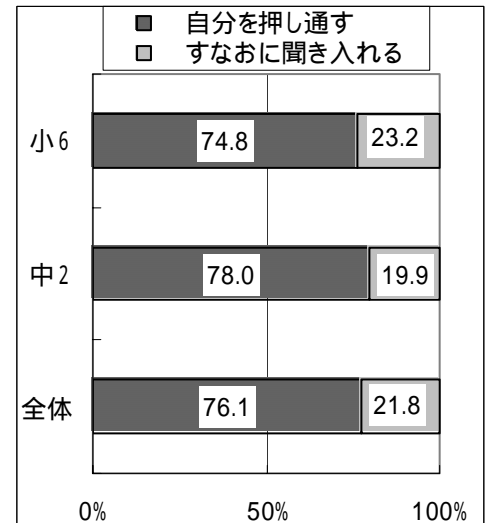
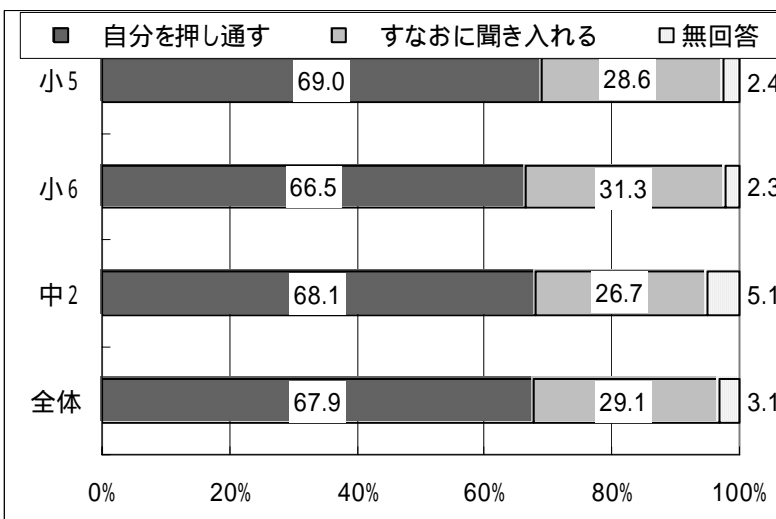


昭和 56 ( 1981 ) 年

考察

「意見の対立はあっても、自分の考えがはっきり言える」が「まわりと協調する」を大きく上回っている。昭和 56(1981)年の調査でも前者の合計が 81.6% となっているので、22 年前とほぼ同じ傾向であることがわかる。

- (2) { 親に対しても、正しいと思えば自分の意見を押し通す。  
親の言うことは、できるだけすなおに聞き入れる。



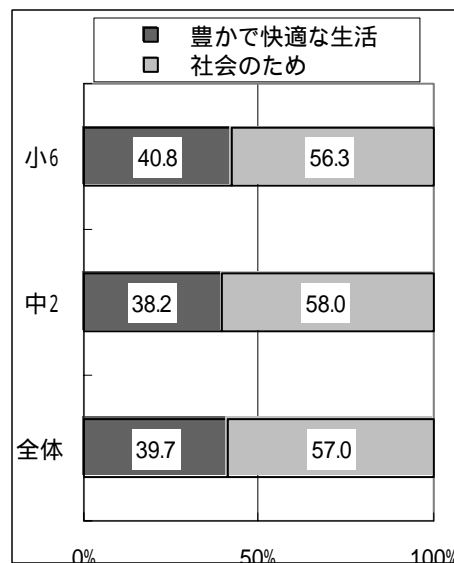
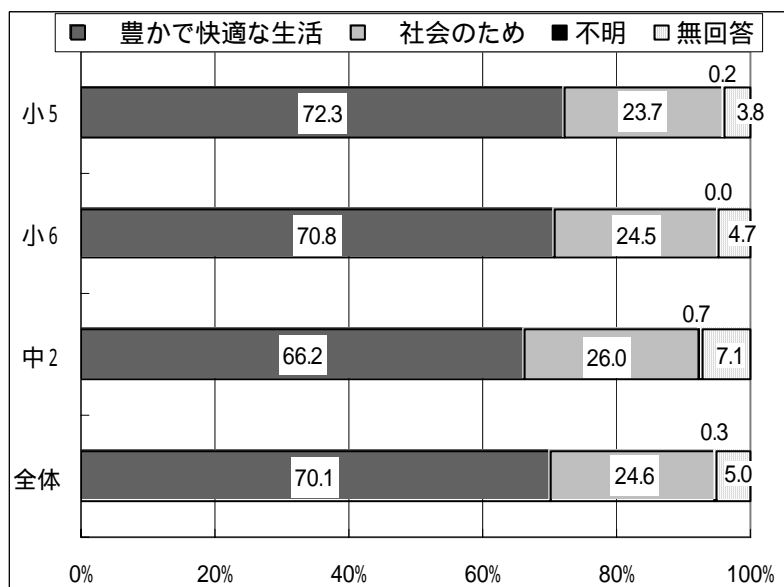
昭和 56 ( 1981 ) 年

考察

「親に対しても、正しいと思えば自分の意見を押し通す」が「すなおに聞き入れる」のほぼ 2 倍の割合である。昭和 56(1981)年の調査では、前者の合計が 76.1% であった。今回 8.2 ポイント減少しているが、22 年前から大きく意識傾向が変化したとは思われない。



- ( 3 ) { お金を貯めて、豊かで快適な生活を送ってほしい。  
生活は苦しくても、社会をよくするためにがんばってほしい。

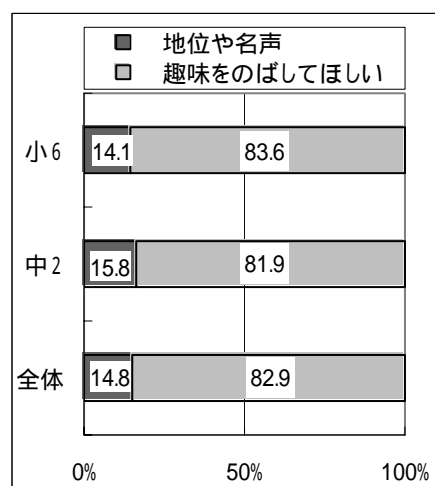
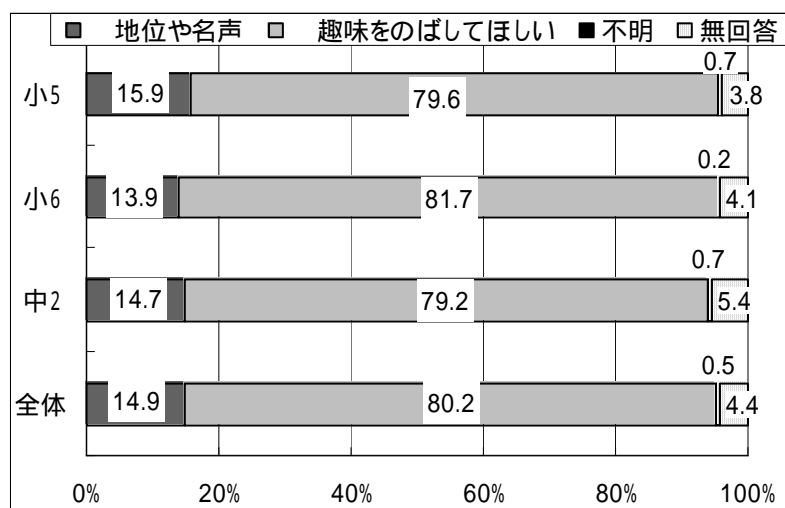


昭和56(1981)年

考察

今回の調査では、「豊かで快適な生活を送ってほしい」は70.1%となり、昭和56(1981)年の調査の39.7%と比べ、およそ2倍の大幅な増加となった。「社会をよくするためにがんばる」ことよりも、「個人の豊かで快適な生活の実現のためにがんばる」方がよいと考える意識傾向が顕著に進んだと思われる。

- ( 4 ) { 社会的に認められるような地位や名声を得てほしい。  
地位や名声にとらわれず、趣味にあった生活を大切にしてほしい。



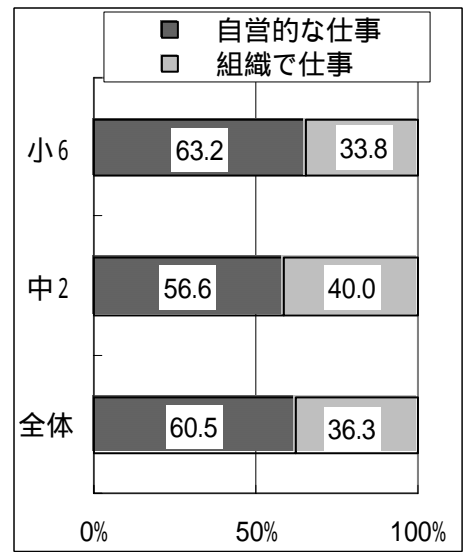
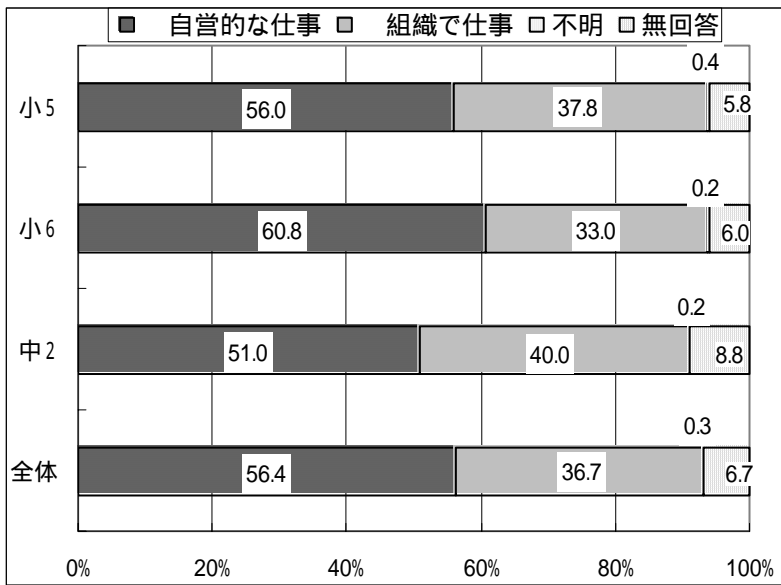
昭和56(1981)年

考察

「趣味にあった生活を大切にしてほしい」が「地位や名声を得てほしい」を大きく上回った。

昭和56(1981)年の調査でも前者の合計が82.9%と、ほぼ今回と同じような傾向を示している。「地位や名声を得ること」は22年前も今も、それほど大切な価値観として捉えられていないようだ。

- ( 5 ) { 技術を生かして、自営業的な仕事をしてほしい。  
会社や役所など、組織の中に入って仕事をしてほしい。



昭和 5 6 ( 1 9 8 1 ) 年

### 考察

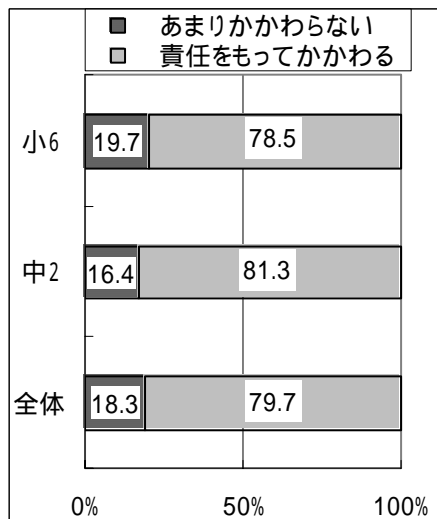
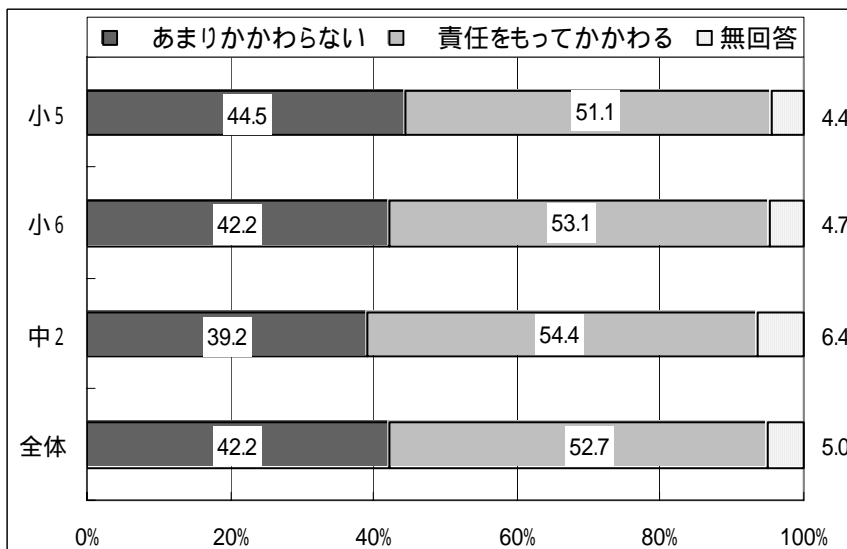
昭和 56(1981)年の調査の合計は、「自営業的な仕事をしてほしい」が 60.5% 「組織の中に入って仕事をしてほしい」が 36.3%であった。今回は 56.4%と 36.7%に変化している。自営業の数の減少が一因とも考えられる。

【設問 12】

次のような対立する意見があります。あなたは、どちらに賛成しますか。

2つの考えの中からあなたの考えに近い方の番号を1つ選んでください。

- (1) { 子どものことは子どもにまかせ、親はあまりかかわらないのがよい。  
 どのなさいなことでも、親は責任をもって子どもにかかわるのがよい。

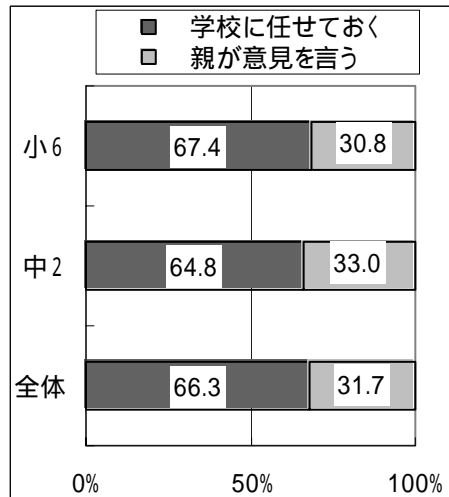
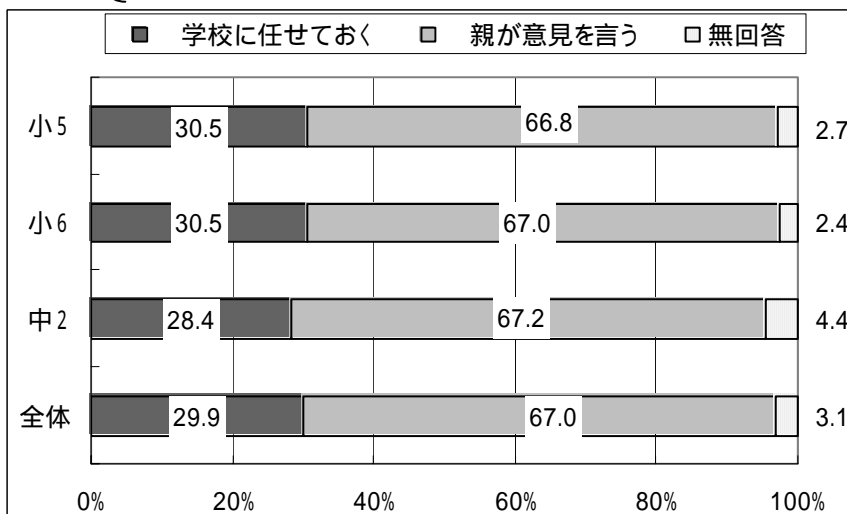


昭和56(1981)年

考察

昭和56(1981)年の調査の合計は、「子どもにまかせ、親はあまりかかわらないのがよい」は、わずか18.3%であったが、今回調査では、42.2%と大幅に増加している。子どもに対して、いわゆる「口うるさい」親が減っていると言えそうだ。また、子どもの行動が22年前と大きく変化してしまったとも考えられる。

- (2) { 学校のことは、先生を信頼して学校に任せておく方がよい結果を生む。  
 学校のことで、気づいたことがあれば親が意見を言った方がうまくいく。



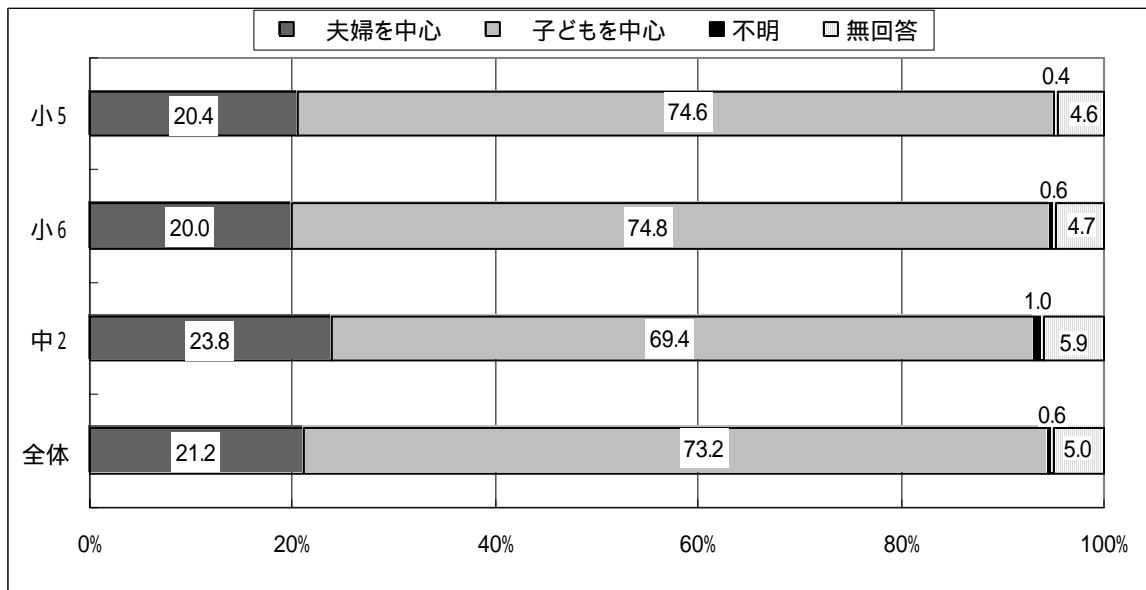
昭和56(1981)年

考察

昭和56年(1981)年の調査の合計は、「学校に任せておくほうがよい」が66.3%であったが、今回は29.9%と大幅に減少している。学校や先生への信頼が揺らいでいるのか、あるいはまた、学校に対してどんどん意見を言っていこうという保護者が増えて

きたとも考えられる。

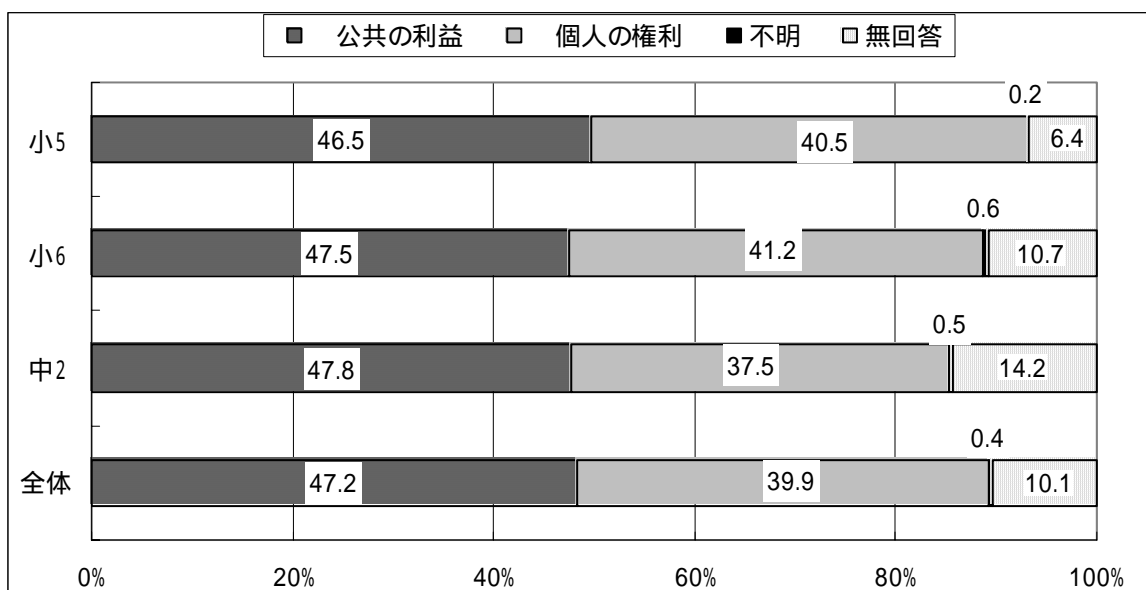
- (3) { 家庭の中では、どちらかといえば夫婦（親）のを中心に考えた方がよい。  
家庭の中では、どちらかといえば、子どものを中心に考えた方がよい。



考察

「家庭は子どもを中心に」が73.2%であり、「夫婦を中心に」の21.2%を大きく上回っている。保護者の意識の上では、「子ども中心」の家庭が多いといえるのではないか。

- (4) { 公の利益のためには、少しぐらい個人の権利が制限されることがあっても仕方ない。  
個人の権利のためには、少しぐらい公の利益が損なわれることがあっても仕方ない。

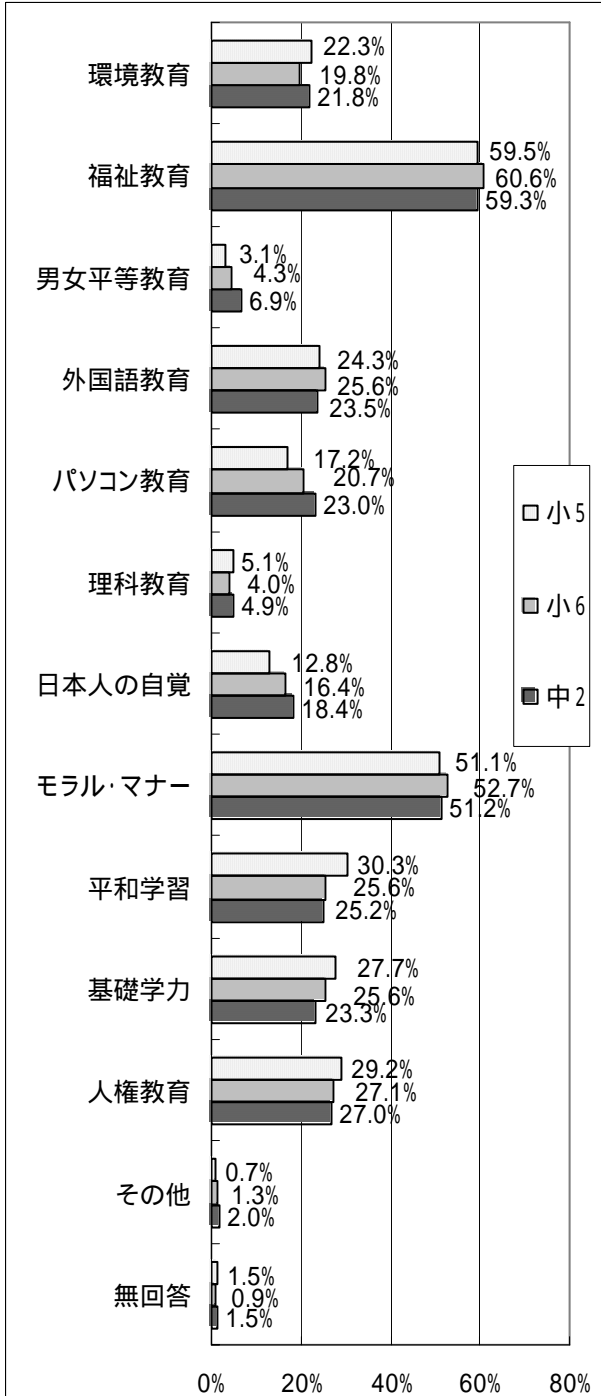


考察

「公共の利益」と「個人の権利」のどちらを優先するべきか、という問いに対してそれぞれ、47.2%と39.9%となっている。「公共」が「個人」を若干上回っている。

【設問 13】

これからの時代の「生きる力」を育てるために、今後、進めていってほしい教育活動はどれですか。次の中から、3つまで選んでください。  
(1つでも2つでもよい)



考察

各学年に共通して、「福祉」「モラル・マナー」の教育への要望が50%以上と群を抜いて高い。これからの未来を担う子どもたちへの期待感や、子どもたちの将来性として、「福祉」の教育に、思いやりや優しさといったソフトな感性を育ててほしいという願いと、高齢化社会など、この分野へのニーズの高まりもあるのかもしれない。また、「モラル・マナー」の教育については、近年の、若年層のモラルの低下や青少年犯罪の増加への危機感から、良識や常識の育成を求めるものと考えられる。一方で、より現実性の高い、「環境」「パソコン」「外国語」の教育がいずれも20%～25%と意外に低く、これらが、各家庭での身近な存在となったことによると考えられる。

「男女平等」「理科」の教育の必要性は、世間の高まりとは逆に、保護者における関心は5%程度と意外に低いものとなった。

## ．まとめ

今回の調査では、小・中学生の保護者を対象に家庭でのしつけや子育ての現状について尋ねている。どの設問も大変興味深い内容が含まれており、現代の親子関係の断面が的確に捉えられている。まとめるなら、子どもに対するしつけが定まらず、子どもを前にして自信が持てない親が増えているように見える。それだけ、学校に対する期待が大きくなっていると考えてよいだろう。

設問どうしを比較しながら今回の調査結果を眺めてみると、現在の保護者が置かれているジレンマ状況がくっきりと浮かび上がってくる。たとえば設問9は携帯電話の所持について尋ねている。子どもが中学生になるとすでに多くの親が「家族との連絡」のために携帯電話を持たせているが、子どもの方はそれを「友だちとのメール」に使っており、かつそのことを親は知っていて「携帯電話の使い方が心配だ」と答えている。数字やグラフの向うに親の心配そうな様子が見えるようである。

設問5と設問6の対比も興味深い。設問6は現在の家庭でのしつけと保護者が子どものときに受けたしつけを比べてもらったものだが、それによると多くの親が起床・就寝、食事、整理整頓、言葉などの基本的な生活習慣について「甘くなっている」と答えている。子どもに甘いことはちゃんと自覚されている。ところが設問5を見ると、子どもをしつけるときに「子どもの意見」を参考にすると答えた親がかなりの割合に上っている。子どもの意見や自主性を尊重したいという気持ちと、子どもに甘いかもしれないという気持ちが親の心のなかでせめぎあっているようだ。

設問12では、同じジレンマ状況が現代社会の風潮として捉えられている。その結果は、保護者の教育観を約20年の時間的な隔たりを置いて比較した貴重なものと言える。それによると、かつては「学校のことは、先生を信頼して学校に任せておく方がよい結果を生む」という意見が多数を占めていたが、現在では「学校のことで、気づいたことがあれば親が意見を言った方がうまくいく」という意見の方がずっと多いことが分かる（設問12-2）。それはそれで親の積極性が感じられてよいのだが、子どもが相手となると様子が少し違ってくる。以前は「どんなささいなことでも、親は責任をもって子どもにかかわるのがよい」という意見が圧倒的に多かったが、今は「子どものことは子どもにまかせ、親はあまりかかわらないのがよい」とする親が増えている（設問12-1）。どこまでも子どもの意思を尊重して一定の距離を保ちたいということのようだ。

現代の親は子どもに対して物分かりがよいと言えばそれまでだが、世の中の変化が激しく日々忙しく世界が回っていくために、子育てについての指針や拠り所が見出せなくなっているという面があるのかもしれない。今回の調査に携わった所員からも、「自分の信念をもって子育てしにくい状況になっている」、「従来の価値観では処理しきれない多くの課題を抱えて戸惑っているのではないか」、「親も地域の中で孤立しているのではないか」、「親が子ども

に言いにくいことは全部学校にお任せみたいになっている」などの感想が聞かれた。

われわれは一昨年にも小・中学生の保護者を対象とした質問紙調査を行っている。そのときは学校完全週5日制の実施や新教育課程の導入を前に、学校に対する期待や関心を尋ねたのだが、要望のみならず批判も含めて保護者が学校に対し大きな期待を抱いていることが明らかとなった。今回のジレンマ状況を背景に置くと、そうした結果も大層理解しやすい。つまり、学校に対する過大な期待は、家庭での子育てに対する不安や親としての自信のなさの裏返しであり、せめて学校には世間の代表として子どものために最善を尽くして欲しいという願いが込められているのではないか。そうした切実な思いがあるために、子どもの非行を防ぐには家庭の働きが一番だと理解されていても（設問10）、学校教育として今後進めてほしい教育活動は、やはり「モラルやマナー」（設問13）となるのである。学校完全週5日制に対して保護者の評価が否定的となるのも（設問1）、今のところそれは世間の縮小・撤退を意味していると考えれば当然の反応と言えるだろう。

実際、学校も地域社会もそれぞれに固有の問題を抱えており、家庭との間に十分な連携や協力を築くまでに至っていない。学校や地域社会だけではない。今回の調査結果は、家庭もまた固有の問題を抱えていることを示唆している。それは、子育ての面からみた親子関係のアンバランスであり（友だち親子の脆さ）、家庭の内と外の境界に生じる緊張関係の処理不全である（子どもの興味はつねに新しい）。学校や地域社会が急激な変化に対応できていないように、家庭もまた新しい環境に見合う子育てのノウハウやスキルが蓄積できていないのだ。こうしたことは個々の保護者の身勝手としてではなく、同時代を生きる者に共通の問題として共感的に理解される必要があるだろう。

幸いなことに今回の調査でも、約3分の2の保護者は子どもについて心配事があるときは学校に相談したいと考えていることが明らかとなっている（設問3）。保護者との間にできるだけたくさんコミュニケーション回路を作り出し、交換すべき情報量を増やして、子育てに協働していくことが望まれる。改革の波にのまれて、どの学校でも教師がみな忙しくしているという事情はあるが、一部の保護者にもたれている「対応が悪そう」（設問3-1）という印象だけはこの機会に拭い去っておきたい。学校・家庭・地域社会の相互理解がさらに深まり、子どもを取巻く環境全体の教育力が向上していくことを期待しよう。